

# ダラム大聖堂の形体とクロノロジー

愛 宕 出

## 序

ダラム大聖堂の建築過程や年代の解釈については、詳しい調査に基づいた20世紀初めのビルソンの論考が長らく基本とされてきた<sup>1)</sup>。異なる見解もあるがそのどれもビルソンの論を覆すには至らず、結局その重要性は現在まで揺るがない。あるいはもっと正確に言えば、ビルソンに含まれる矛盾は未解決のまま残されている。ただ近年サールビーの論が不完全ながらもいくつかの修正を加えている<sup>2)</sup>。以下本論ではビルソンやサールビーの論旨の矛盾を指摘し、それらとは異なった解釈を提出する。そしてこれがイングランドの中世建築のひとつの本質的性格に関わるものだと考えるのでその点にも触れることにする。

## クロノロジー<sup>3)</sup>

まずダラム大聖堂の建築に関わる同時代文献の記事とそこから導き出されるクロノロジーをまとめておこう。

最も重要な文献である1105年頃書かれた「シメオンのダラム教会史 *historia Dunelmensis ecclesiae*」<sup>4)</sup>によると、ノルマン朝の最初の司教ウォルシャー Walcher (1080年の暴動で殺害) がすでに大聖堂の在俗参事会をベネディクト会修道院に改革し新しい教会堂を建設する意図を持っていたとされる (L.-B. 1357)。そして回廊東翼の一部が彼の時期の建築だと考えられている。大聖堂参事会を共同生活を営む修道院組織に改革することは征服者であるノルマン朝

の方針であると同時に、教皇庁のグレゴリウス改革の一環とも言えるものである。この時期、アングロサクソン人の高位聖職者はそのほとんどがノルマンディの教会組織からの人物に入れ替えられるが、カンタベリー大司教ランフランク Lanfranc がその中心的存在となって教会組織の改革を推進する。

次の司教ウィリアム William of St Calais 期とそれ以後についての「シメオンのダラム教会史」の記事は以下のとおりである。1083年修道院が創立される。1093年教会堂建築を開始する（司教ウィリアムは1092年政治亡命から帰還する）（L. -B. 1365）。1096年のウィリアム没後3年間の空位期を経て、1099年ラナルフ Ranulf Flambard が司教に就任するが、この時点で工事は身廊に達している（L. -B. 1375）。1104年聖カスバートの聖遺物移動（*translatio*）が行われる。聖遺物移動の儀式は教会空間の一部が使用可能となった段階で可能な限り早い時期に行われるもので、この時点で内陣の聖職者席 *choir* が使用可能になったと考えてよい。「マムズベリのウィリアム William of Malmesbury の英国司教録 *de gestis pontificum Anglorum*」には、まさにこの前夜に内陣ヴォールトのセンタリング（ヴォールトを支えておく型枠）が勝手に崩壊したとあり、ヴォールトができたばかりであることを示している（L. -B. 1381）。さらにまた「シメオンのダラム教会史」によると、1128年の司教ラナルフ没時には身廊側壁は *testudo*（ヴォールトと解釈される）まで完成している（L. -B. 1375）。つまり身廊側壁は上方まで立ち上がりヴォールトを残すみの状態である。そして続く5年間の空位期に身廊ヴォールトが完成する。

教会堂建築のクロノロジーについての確定的事項をもう一度列挙すれば次のとおりである。

1093年東から開始

1099年には身廊に達している

1104年聖遺物移動 内陣ヴォールト完成

1128年には身廊の壁が上方まで完成

1133年までには身廊ヴォールトが完成

また装飾モチーフなどから次の点もほぼ確定的な事実である。つまり、建築

は東内陣から西に向かって進行するが、大きく二つの工期に分かれる。第一期は内陣、翼廊（南翼廊ヴォールト以外）、身廊東端部分である（身廊の第一期部分は、基礎で東3ベイ、アーケード層で東2ベイ、トリビューン層で東1ベイまで）。第二期は南翼廊ヴォールトと身廊の大部分である。二つの工期の違いは特に、第二期に入ってアーチやリブにジグザグ装飾 **chevron** がつくことであり、この点非常にわかりやすい。二つの工期の境目は年代的には1110年頃である<sup>5)</sup>。

建築事業の主導者については、「シメオンのダラム教会史」によると、ウィリアム期には司教が教会堂建設を担当し修道院 **priory** が修道院建築を担当していたが、同司教の死後は修道院組織が修道院建築を犠牲にして教会堂建設にあたったとある (L.-B. 1375)。これに対して、エアドは修道院創立や教会建築を実質的に主導したのは司教ウィリアムでなく修道院組織とその筆頭ターゲット **prior Turgot** であったとしている<sup>6)</sup>。この場合どちらを主導者としても、背景となる教会改革の思想は同じとみなせるから論に影響はない。ただ次の司教ラルフ期になると建築は寄進財でまかなわれており、建築進行も寄進次第であったとある。つまりこの期には明らかに司教でなく修道院組織が建築にあたったと考えうる。

以下工事の進行順に記述していく。

## 内 陣

ビルソンによると、1093年の開始の時点では、全空間をリブ・ヴォールトで覆う構想であったと思われる。この構想に従って内陣全体と翼廊の東壁までが建設される (図1, 3)。

中世最初のリブ・ヴォールトといわれるヴォールトを持つダラム大聖堂の内陣の平面は三廊形式で、4ベイの直線部の東端に3アプスがつき、側廊アプス上には東双塔があった<sup>7)</sup>。ベイ分割は支柱変換方式。強柱はアーケード層から上方まで貫通する複合柱、弱柱は単円柱。この単円柱の表面には螺旋文様の溝

彫りが入っている。ただ単円柱といっても側廊がわには3本の小円柱がついていて(図4),これがそれぞれ側廊ヴォールトの対角線リブ(両側の2本)と横断アーチ(中央の1本)を受ける。対応する側廊外壁にも同様の役割を持った3本の小円柱が壁に添えられている。側廊ヴォールトは最初に架せられたリブ・ヴォールトである<sup>8)</sup>。内陣中央の側壁においては(図3),弱柱が分節要素を持たないためトリフォリウム層以上にヴォールトのリブを受ける3本の小円柱がつく。壁はその分セットバックしている。

中央ヴォールトは13世紀半ばの「9祭壇の祭室 Chapel of Nine Altars」増築に伴い、改められた。そのため元来のリブ・ヴォールトは残らない<sup>9)</sup>。元来のリブ図形の復元については諸説あるが、サールビーの横長の4分ヴォールト説が最も妥当だろう。それに従えば、トリフォリウム層からの3小円柱は側廊と同じく、それぞれ対角線リブと横断アーチを受ける<sup>10)</sup>。

## 翼 廊

翼廊で最も問題になるのがそのヴォールトである(図8, 9)。最終的には南北翼廊ともにヴォールトを持つようになるが、北のヴォールトは第一期であるのに対し、南のヴォールトは明らかに第二期に架されている。高窓層の処理を見ると、北翼廊の高窓層はヴォールトを想定して形づくられているが(図5, 6, 10),南翼廊の高窓層(図11)は東西壁とも、いったんヴォールトなしで、つまり木骨天井で上方を覆うことを想定して作られており、第二期に入って、高窓層の開口を修正してヴォールトが架されている。つまり南翼廊は下2層の段階では、北翼廊と同様、ヴォールトを架すことを想定していたと考えられるが、高窓層に入った段階で計画変更して木骨天井で完成させたのである。つまり第一期の終わった時点で北翼廊はヴォールト、南翼廊は木骨天井という形でいったん完成しているのである。そして南翼廊は第二期に入って再びヴォールトの構想に戻ってやり直しているのである。

さらに翼廊東西の壁の違いが指摘されることがある。西壁は東壁と比べて分

節要素の小円柱が少なく、東壁と対照的に平板で簡素な印象を与える（図7）。ビルソンがこれを途中での構想変化と結びつけているのである。

そこでまずビルソンの論を追ってみよう。全空間をヴォールト化するという1093年の開始時点での構想が実現されるのは、内陣と翼廊の東壁までである。1096年司教ウィリアムが没すると司教財が国王に没収され資金不足に陥った結果<sup>11)</sup>、工事が遅滞し、また進行中の翼廊で一部計画変更が行われる。つまりまず、側廊を西にはつけず、翼廊西壁は当初の構想より簡略化される。そして翼廊や身廊のヴォールト構想が放棄されるのである。南翼廊ではトリビューン層まではヴォールトを想定した形であったのが、高窓層は木骨天井を想定して形作られ、木骨天井で完成される。しかし1104年の聖遺物移動を契機に寄進の増加で財政改善へ向かい、その結果北翼廊は元来の構想どおりヴォールトを架すことができた。

ビルソン自身これ以上明確に述べているわけではないが、翼廊に関しては、南翼廊が先行してその途中で計画変更がなされたが、北翼廊は工事が南より遅かったためその途中で財政回復に向かいヴォールトを架すことができた、ということになる。

この論の問題点を指摘すれば第一に、第一期に属する北と南で建築の年代にかなりの時間差を想定しなくてはならない点である。また財政回復後、第一期が完成した時点では南が木骨天井、北がヴォールトという形になっているのだが、財政悪化とはいえこのような非対称でアンバランスな最終形態をとるというのはおそらくあまり例がないだろう。そして最後に、1104年の聖遺物移動のとき内陣ヴォールトはできたばかりである。つまり1096年に財政難のため翼廊ヴォールト構想は断念されながら、内陣ヴォールトだけは以後も継続されていたことになる。

サールビーは、こうした難点に気づいていたかどうか、ビルソンの論に二点の変更を加えている。翼廊西壁の解釈と南北翼廊の時代順についてである。

第一点の翼廊西壁の解釈は明らかに正しいので確認しておく（図7）<sup>12)</sup>。翼廊は西に側廊を持たず、したがってトリフォリウム空間もない。つまり背後に

空間を持たない。そして、翼廊端西（北翼廊の場合北西角、南翼廊の場合南西角）には階段があり、トリビューンのレベルでそこから身廊トリビューンへの壁中通路を通していている。もし東壁のようにトリフォーリウム層から上に分節要素をつけようとするれば、壁をセットバックさせねばならないが、そうすると通路幅がとれないのである。これが、西壁がトリビューン層以上の分節要素を持たない理由である。セットバックの不要な強柱の分節要素は上方まで貫通しているということが、サーブリーのこの説明が正しいことを証していると言えるだろう。さらに翼廊西にはヴォールト支持の役割をも果たす側廊がないため、セットバックによって壁の上半の厚みを減少させることを嫌った、という理由も考えられよう。したがって、翼廊西壁は1096年の財政難による計画縮小による形ではない。

次にサーブリーは、ビルソンの論とは逆に北のほうが南より建設が早かったとしている。短いコメントなので引用する。

「北翼廊が構想どおり中央ヴォールトで建設されたのに対し、南翼廊の上に構築された木骨天井が構想変更を示しているとするれば、北が南より先に建てられた可能性がある。南側に修道院建築を有する教会としては、これは通例ではないと考えられよう。しかし、アングロサクソンの教会堂が1104年の聖カスバート聖遺物移動まで残されており、翼廊端の壁がそれに接していたとするれば、南翼廊完成の遅れは起こりえたであろう。」<sup>183)</sup>

この問題についてはこれ以上語っていない。そこでもう少し精密に考えてみよう。サーブリーに従えば、北翼廊は財政難が生じた時点ですでにヴォールトまで完成してしまっている。他方南翼廊は、トリビューン層まで建ち上がったところで財政難から無ヴォールトに変更され、高窓と木骨天井がその後作られた、ということになる。ところで文献から財政難が生じうると考えられるのは、やはり1096年の司教ウィリアムの死去しかない。ところが、1104年の聖遺物移動の時に内陣中央ヴォールトが出来上がったばかりなのである。今見たように、北翼廊ヴォールトは1096年という年代ですでに完成している、あるいは少なくとも完成の見込みにあるというのだから、明らかにこの論は矛盾する。

聖遺物や聖職者席のある内陣中央ヴォールトは絶対的に他より優先されると考えられるからである。

ビルソン、サールビーともに、第一期の完成時点での南北翼廊のアンバランスを説明するために財政悪化を想定するのだが、二人ともこの問題になると少々歯切れが悪い。

結論を言えば、南北翼廊の間に不自然な建築年代の差を設けず、南北の違いは財政的なものでなく意図的なものであったと考えればよいのである。そしてその理由は、南翼廊が修道院建築から教会堂の新聖職者席への通路に当たる、ということである。つまり、当初は最終的にすべてヴォールトの予定であったのが、できるだけ早く使うために、聖職者席への通路となる南翼廊を木骨天井に変更して完成を早めた、と考えられるのである。それを示す二つの傍証が、聖職者席の位置と修道院建築から教会堂への入口の位置である。

ダラム大聖堂の聖職者席は交差部より東にあり、これはイングランドでは例外的である(図2)<sup>14)</sup>。イングランドではほとんどの場合、聖職者席は交差部から身廊東部の一部までを占めるのである<sup>15)</sup>。ダラムにおいて聖職者席が交差部より東にある理由は、おそらく立地から身廊があまり長く取れない、ということが見越していたからであろう。ダラム大聖堂はウィア Wear 川の蛇行で形作られた半島のように突き出た立地に建っており、現在でもすぐ西は川への急な崖、東は城壁道路 North Bailey への斜面である。このため、東西方向に制限があって、平信徒空間としての身廊を十分にとるためには聖職者席は身廊方面へあまり張り出せないのである<sup>16)</sup>。そしてその結果、他の例では身廊のかなりの部分まで建設が進まないで聖職者席は使用可能な状態とはならないのに対し、ダラムでは身廊は言うに及ばず翼廊さえ未だ工事中の段階ですでに聖職者席が使用可能になるのである。

次に修道院建築からの入口は南翼廊西壁にとられている。身廊東端の現在の入口は司教ユーク Hugh le Puiset 期(1153—1195)にここへ移されたものである<sup>17)</sup>(図2はこの時期以後の状態の復元平面図である)。ほとんどの例では、修道院建築から教会堂への入口は教会堂身廊の東端にある。つまり修道士の動線

は回廊北東角から南側廊へ出て、身廊中央の障壁から聖職者席に至るというコースをとる。それに対して聖職者席が東翼に収まっているダラム大聖堂では、南翼廊が修道士の聖職者席への通路に位置するのである。したがって、他の例と異なりダラムでは、南翼廊に直接入口を設けておいて、そこを通行可能な状態にすれば聖務日課が可能なのである。だから南翼廊の完成を少しでも早めることが重要となってくるのである。もし南翼廊をヴォールト化したければ、後になって身廊東部分が出来上がった段階で聖職者席への通路をそちらへ移動して工事にかかればいい。実際そのとおりになるのである。

以上のように考えるならば、1104年の聖遺物移動がこの問題と直接関わることになる。

つまり、1104年のまさにこの時点で木骨天井の南翼廊が完成し、北翼廊はこれからヴォールトに取り掛かろうという段階である、ということになる。すでに見たように、聖職者席を覆う内陣中央のヴォールトがちょうど完成したばかりである。工事の進展順序から言えば次が翼廊ヴォールトである。年代的にも上述の解釈とうまく照合する<sup>18)</sup>。

1196年司教ウィリアムの死に伴い財政難が生じたという見方については、「シメオンのダラム教会史」の短い文章を、修道院組織が努力してよくそれをカバーした、と解釈しておこう<sup>19)</sup>。この時点では実際、修道士たちの場である聖職者席を完成するという、修道院組織が勢力を注ぐに十分な動機があるのである。

以上の解釈で翼廊ヴォールトの年代はかなりすっきりと説明がつく。ただ一見この考え方を根本的に否定するとも思われる点がある。

南北の天井の違いは建築家や施主としての修道士たちにとってどう見ても好ましいものではなかったはずである。通路として使うため木骨天井にして早く完成させた南翼廊は、いわば仮の完成と見られていたのではないかと考えられる。もしそうならば、高窓層は先立ってヴォールトを想定した形に作っておけばいい。木骨天井はこのような形にも容易に適合させえたに違いない。なぜそうしなかったのだろうか。



これについては、建築家あるいは施主が不用意だった、としか言いようがない。しかしこれはある意味でイングランド的なあり方を反映していると思われる。イングランドでは無ヴォールト建築がヴォールト建築に移行することが他地域と比べて比較的容易である。というのも側壁が「厚い壁」<sup>20)</sup>であるため、壁の形や構造に関わらずヴォールト化が可能なのである。従っておそらく、壁の構想・構築段階でも上方がヴォールトなのか木骨天井なのか未決定の状態もありえたであろう。さらにヴォールト成形のやり方も側壁に接する壁アーチが最後に決まるというノルマンディ以来のものである。つまり既存の下部構造に自由に対応できるようなやり方でヴォールトの形態決定が可能である。だから、南翼廊の木骨天井を想定した高窓層は、先のヴォールト化を見込んではいたとしてもその実現までの期間が比較的長い（10年程度の想定？）ために一応の完成形をとらせたのだ、とも理解できる。（この場合の具体的経過はもちろんわからないが）ともかく構想段階でのあいまいさ、長期的な構想や計画の欠如がイングランド的な特色だということができる。そして次に見る身廊ではそれが積極的なかたちに反転すると言ってもいい。

## 身 廊

すでに述べたように、身廊は1110年頃までの第一期で基礎が東から3ベイ分、アーケード層が東2ベイ、トリビューン層が東1ベイ出来上がっている。側廊ヴォールトも東2ベイが架せられている。つまり第二期の部分はアーケード層の（東から）第3ベイ以西、トリビューン層は第2ベイ以西、高窓層は第1ベイ以西である（さらに南翼廊ヴォールトも第二期である）。ビルソン、サールビーともにこのあたりの事情を以下のように説明している。

まず第一期途中の財政難で身廊では最初からヴォールトの構想が放棄される<sup>21)</sup>。ところが第二期に入ると再びヴォールト構想が復活し、まずいったん完成された南翼廊の木骨天井をリブ・ヴォールトでやり直す。そして身廊では第

一期にできた壁の形を尊重しながら、やはりリブ・ヴォールトを伴って構築していく。1128年には文献にあるとおり身廊側壁が完成し、1133年までには身廊ヴォールトが完成している。

身廊では第一期でヴォールト構想が放棄されたという根拠は、とくに身廊側壁のトリビューン層の処理である（図12, 13）。身廊側壁は内陣や翼廊東壁のようにこのレベルでセットバックしない。つまり、上のヴォールトに応じる分節要素がトリビューン層から始まらない。この点は翼廊西壁と同一原則で形作られている。またトリビューン層開口は内側オーダーにくり型、外側オーダーはくり型なしで、これは翼廊西壁の身廊トリビューンに開く開口と同じ原則である（図7）。ビルソンの場合、これだけですでに翼廊西壁と同様、財政難によるヴォールト放棄の結果であることを示すということになる<sup>22)</sup>。

次に交差部大柱西の小円柱の数が問題となる（図13）。トリビューン層で壁のセットバックがなく、そのためヴォールトの諸要素に対応すべき小円柱が内陣や翼廊より一本少なくなっているのである。内陣や翼廊東壁においては対角線リブを受ける小円柱が、ここではトリビューン開口アーチの外側オーダーを受けている（図8, 9）。したがって、対角線リブを受ける小円柱がない、つまりリブ・ヴォールトが想定されていない、というのである。

次に第二期ではヴォールト構想が復活するが、すでに第一期の壁は無ヴォールトを想定しているために、その形と折り合わねばならない。そのため身廊のさらに西の部分でも第一期の壁の形を継承し、リブは小円柱でなく持ち送り *corbel* に始まるのである<sup>23)</sup>。

身廊東端ではトリフォーリウム層まで第一期に建設されている。サールビーはこの部分を一見うまく説明している（図13）<sup>24)</sup>。つまり、第一期の状態では行き場のない対角線リブには第一期で交差部アーチ外側オーダーに設定された小円柱が当てられる。その代わりに、交差部外側オーダーは行き場を失って途中消滅する。ここから見ても第一期ではリブ・ヴォールトは想定されていなかった、ということになる。

さて論理的に考えれば、以上のビルソン、サールビーの考え方は必ずしも正

しいとは言えない、ということがわかる。

まず第一期についてであるが、第一に身廊側壁トリビューン層のセットバックしない処理からヴォールト放棄は推論できない。というのも同じ処理の翼廊西壁はヴォールトを想定しているからである。（南では高窓層でヴォールト放棄に変更されるが、北では終始ヴォールトの構想が維持されている）（図7、8）。つまり身廊では翼廊西壁と同様、持ち送りに始まるヴォールトが想定されているとも考えうるのである。そして実際第二期に入って弱柱上の持ち送りに始まるリブが建設されるが、これは第一期での構想どおりなのかもしれない。

第一期のほかの部分であるアーケード層と側廊を見ると、同じことが言える。このレベルでは側廊ヴォールトもあわせて2ベイ分が第一期で出来上がっている（図14）。まず弱柱の単円柱が内陣・翼廊のそれと異なる（図4）。側廊に面したがわの分節要素がなくなるのである。そしてその分だけ円柱の太さが増加している<sup>25)</sup>。また側廊外壁の向かい合う地点の分節要素も、内陣では3本の付け柱であったのが身廊では一本の大きな単位に変わっている。つまり身廊では論理的な分節要素が簡略化、省略化されるのである。そして言うまでもなくこの単円柱と側廊外壁の一本の付け柱は側廊ヴォールトを最初から想定しているのである。さらによく見ると、翼廊西壁と揆を一にするこの単純化は、ヴォールトへの適応をさえ示している。翼廊東壁・内陣での単円柱背後の3小円柱は横断アーチ1、対角線リブ2に対応し、論理的である。しかしこれがかえって側廊ヴォールトの成形を難しくしている。例えば対角線リブがアーケードアーチにかぶっていたり<sup>26)</sup>、ヴォールトの小間の形に歪みが生じているのである<sup>27)</sup>。ビルソンも指摘しているように<sup>28)</sup>これらの原因は結局、ヴォールト各要素に対応する分節要素が上方ヴォールトの形を規定してしまっていることにある。身廊での単純化によって、側廊ヴォールトは下の要素に規定されることなく、構築に際して自由に融通を利かすことができるようになるのである。だからロマネスク建築の論理性の放棄とヴォールトの放棄とは別の事柄である<sup>29)</sup>。トリビューン層の第一期末の形もまったく同様に、つまりヴォールトの成形に

便利なように変更したと考えてもいいわけである。

次に第二期である。身廊東端の交差部大柱と隣接する部分で交差部アーチ外側オーダーが対応する小円柱不足のため途中消失することについては、小円柱不足自体が第一期でのヴォールト放棄を示すとは限らない、ということは上に見た。第一期には持ち送りに始まるリブ・ヴォールトを構想していた、と考えてもいいからである。実際身廊ヴォールトは第二期に入って持ち送りに始まる形で架される。ただ、身廊東端だけは対角線リブが持ち送りに始まらないのである。一見持ち送りにはじめればよいものを、である。

その理由は身廊最東ベイが短いことにあると考えられる。各ベイの東西の長さを見ると（図1）、内陣4ベイのうち東3ベイが長めにとられ、西ベイはかなり短くなる。これは翼廊東側廊の幅に規定された結果である。身廊では第一期に基礎が構築された東3ベイが内陣西ベイに合わせたと思われる短いものである。そして第二期に入ってから基礎が作られた第4ベイ以西は再び長くとられている<sup>30)</sup>。第二期でベイを長くしたのは身廊東の短いベイが不自由さをきたしたからであろう。そして短い東3ベイのうち最東ベイは最も短い。これは、ベイ長さを柱の中心の間で均等にとったが、太い交差部大柱によって最東ベイがさらに短くなったことによる、と思われる。

その結果、ヴォールトのリブ起点を少しでも東にとりたいのである。つまりヴォールトの三次元的形態の成形のためにも、最東の対角線リブは西に続くそれと同じ角度で側壁からはじめたい。これが、身廊最東の対角線リブを持ち送りではなく、元来交差部アーチ外側オーダーに当てられていた小円柱から始めた理由である。

またこれと関連するのが高窓層開口の位置である。身廊ではアーケード柱がA-B-A-Bの支柱変換であるため、ヴォールトの壁アーチ頂点が幾分弱柱の方にずれる。したがって、高窓も中央より弱柱寄りにずらされている。ところが最東ベイでは高窓がベイ中央に位置している<sup>31)</sup>。この処理もベイ東端を実際よりもすこし東に想定した結果だと考える。そのためとくに北壁では（図12, 13）高窓層の東部分（交差部大柱に隣接する部分）に壁がわずかしこ残ら

ず、仮に対角線リブを持ち送りに始めようとしてもその場がない。もちろん高窓層はヴォールトと同じ第二期だから、持ち送りが置ける分の壁を作ろうと思えばできたはずである。したがって高窓開口の位置や対角線リブの始め方の不規則性は、ベイの端を少しでも東にとるという動機に発する意図的なものである<sup>82)</sup>。

次に身廊東端を翼廊の交差部隣接部分と比べてみよう(図8, 9)。翼廊では、交差部大柱すぐ横は、両側(東西)の付け柱の数が東で1本多いため、西では必然的に持ち送りをつけざるを得ない。他方身廊東端は両側(南北)が対等の形のため、アーチ・オーダーの一つが途中消滅するという形で比較的うまく繕うことが可能だったと言える。

## まとめと結論

以上に見た翼廊と身廊開始部分の経緯を簡単にまとめる。

内陣ヴォールトが完成するとすぐに1104年の聖遺物移動の儀式が行われる。それにあわせて南翼廊は木骨天井にて一応の完成とし、聖職者席への通路を確保した。北翼廊ヴォールトはそれ以後(第二期開始の)1110年頃までに架せられた。南翼廊は、第二期に入って身廊がある程度完成し聖職者席への通路として使用可能となった段階で、ヴォールト化される。

翼廊東壁は内陣と同様、分節要素による論理的構造を尊重して形作られるが、いくつかの変則性に甘んじなければならなかった<sup>83)</sup>。まず内陣と比べてベイ長さが短いため、トリビューン層から始まる弱柱上の小円柱にあてる壁面を確保できず、小円柱は内陣では3本だったのに対し2本とする(図5, 6)。その結果、リブ・ヴォールト図形は横断アーチを欠いたものとなる。他方、西壁はトリビューン層に壁中通路を通すため、壁のセットバックをやめて分節要素をなくして簡略化する(図7)。したがって西壁ではリブは弱柱上で持ち送りに始まる。また一番外側のベイでは西壁がわに階段塔がつくられた結果、東壁2ベイに対応する西壁は1ベイとなり、ヴォールトも1ベイの図形となる。

そのために東壁弱柱上の2本の小円柱は上方リブを欠いたままで残される(図6, 8, 10)。

こうした翼廊での困難と試行錯誤から得られた教訓は、さまざまな不規則性や予期せぬ事態において論理的要素(分節要素)がかえって桎梏となる、ということであつたらう。壁の構築に際しては、論理的分節要素によって上方の構造を前もって規定するのではなく、上方構造は不定にして、そこへかかったときにその場で最もやりやすい形を考えればよい。また論理性を追及すれば「厚い壁」を消費することになりヴォールト支持には不利である。翼廊での経験は、こうした考え方で身廊の形に影響したと思われる。

身廊ではまず、側廊において分節要素を簡略化し(側廊外壁の付け柱の単純化、そしてアーケード弱柱=単円柱の側廊がわの小円柱除去)(図14)、側廊ヴォールトの成形と構築をその場で自在に融通がきくようにした。またトリビューン層からのセットバックをやめ、厚い壁をそのまま上方にも継続する(図12)。これはヴォールト支持にもなる<sup>84)</sup>。そして分節要素を減らし、ヴォールトは持ち送りに始まる構想となる。

第二期に入って、第一期で決められた最東ベイの短さを是正するため、第一期で交差部アーチ外側オーダーにあてられていた小円柱を対角線リブに対応させ、その外側オーダーは途中消滅させた。一見わからない処理で論理性を破ることで微調整をはかったのである。中央ヴォールトは東端以外は、第一期での構想どおり、対角線リブが持ち送りに始まるリブ・ヴォールト(ヴォールト図形は翼廊を踏襲)にする。

以上のように、身廊では翼廊での経験を積極的発想から応用する。つまり論理的明晰さのために壁の厚みを消費するのをやめ、全体的論理ではなくその場その場での部分的論理で思考していく。そのほうが一面で現実的・实际的であり、他面で自由さや個性を発揮することができる(その代わりに構造を保障する「厚い壁」はいわば無意識の領域として存続することになる)。構想の曖昧さ、長期的な構想・計画の欠如が、融通性、臨機応変さという形でイングランド独特の柔軟さに止揚されるのである。

あらゆる形にリブ・ヴォールトとの連関を考えるとというビルソンの論は20世紀初の機能主義的・合理主義的理論の持つ限界を示していると指摘することはできよう。しかしその矛盾が長らく手付かずであったのは、反機能主義的思想、つまりすべてにおいて性急に意味を読み取ろうとする方法が、ニュートラルな視点で形を分析するという機能主義の良質な側面を継承しなかったからでもある、とも言えるだろう。

註

- 1) J. Bilson "Durham Cathedral. The Chronology of Its Vaults" (The Archaeological Journal 79, 1922).
- 2) M. Thurlby "The Romanesque high vaults of Durham Cathedral" (Engineering a cathedral. Proceedings of the conference *Engineering a cathedral* held at Durham Cathedral on 9—11 September 1993 as part of the 900<sup>th</sup> anniversary celebrations of Durham Cathedral 1993).
- 3) ダラム大聖堂のクロノロジーについては以下が主要論文。  
M. G. Snape "Documentary Evidence for the Building of Durham Cathedral and its Monastic Buildings" (The British Archaeological Association. Conference Transactions for the year 1977. Medieval Art and Architecture at Durham Cathedral" 1980).  
D. Rollason "Durham Cathedral 1093—1193 sources and history" (Engineering a cathedral 1993).  
また同時代文献の主要なものは以下にある。  
O. Lehmann-Brockhaus "Lateinische Schriftquellen zur Kunst in England, Wales und Schottland vom Jahre 901 bis zum Jahre 1307" 1955 (本文中の記号 L.-B. は同書の文献番号を表す).
- 4) 1105年頃修道士 Symeon により書かれ、それ以後の記事は司教ラナルフ Ranulf 期直後に別の修道士によって書かれた。ほぼ同時代で非常に信頼度の高い文献。背景については以下に詳しい。A. J. Piper "The First Generations of Durham Monks and the Cult of St. Cuthbert" ("St. Cuthbert, His Cult and His Community to AD 1200" 1989).
- 5) ジグザグ装飾 chevron ornament は1110年頃イングランドに現れ、かなり正確な年代指標である。A. W. Clapham "English Romanesque Architecture" 1934 II p. 128.
- 6) W. A. Aird "An Absent Friend: The Career of Bishop William of St. Calais"

(“Anglo-Norman Durham 1093—1193” 1994).

- 7) この部分は13世紀半ばの9祭壇の祭室 Chapel of Nine Altars 建設に伴い改変を受け、現存しない。
- 8) サールビーは側廊が当初は交差ヴォールトを架される予定であった、と示唆している。M. Thurlby “The purpose of the rib in the Romanesque vaults of Durham Cathedral” (Engineering a cathedral 1993).
- 9) 1991年ヴォールト web の痕跡が発見された。M. Thurlby “The Romanesque high vaults of Durham Cathedral” p. 43.
- 10) ビルソンは横断アーチなしの（身廊のヴォールトと同形の）形で復元を示唆している。またジェームスが6分ヴォールトの復元案を示している。J. Bilson 1922 p. 129. 註1 J. James “The Rib Vaults of Durham Cathedral”. (Gesta 1983).
- 11) 慣習により司教の空位期にはその財は国王の占有するところとなる。
- 12) M. Thurlby “The Romanesque high vaults of Durham Cathedral” p. 53.
- 13) M. Thurlby “The Romanesque high vaults of Durham Cathedral” p. 55. 旧教会堂（c 995—998献堂）の形や位置についてはあまりわかっていない。E. Gee “Discoveries in the Frater at Durham” (Archaeological Journal CXXIII 1966).

司教ウォルシャー Walcher が建てさせた現在のものより幾分小さい回廊が発掘されており、その位置から、旧教会堂はその南壁が現教会堂のそれより20数フィート南にあり、仮に翼廊を伴うとすれば、南翼廊は現在のそれと重なる位置にある、と推定できる。ただし、教会堂の規模は現在のものと比べると格段に小さいもののはずであるが、旧教会堂南翼廊が現南翼廊と同様に修道院建築東翼すぐ北に接してあったとすれば、翼廊はあまりに大きすぎると思われる。

文献にはウィリアム William of St. Calais が建築開始と同時に旧教会堂を取り壊したとある。しかしこれはありそうもないことだとして、事実誤認の記述だとされている。しかしこれを事実だとして、建築期間中は何らかの別の空間を使っていた、と考えればかえってわかりやすくなる。そうすると、ウォルシャー期の小さい回廊はこれから建設すべき新教会堂を想定してつくられたものであり、ウィリアム期に教会堂建築構想がさらに拡大されて現教会堂に至った、ということになる。実際ホープの教会堂発掘の試みではなんらの成果もなかったのである。

- 14) Sir W. St. J. Hope “Quire Screen in English Church, with special reference to the Twelfth Century quire Screen in the Cathedral Church of Ely” (Archaeologia LXVIII 1917) p. 68. ホープによると聖職者席が東翼におさまるイングランドのもう一例が Bardnay にある。
- 15) ただしほとんどの例では後の内陣拡張に伴い聖職者席は交差部以東に移っている。
- 16) 身廊東端の障壁前に平信徒向けのイエス祭壇があった。A. Klukas “Durham



Cathedral in the Gothic Era: Liturgy, Design, Ornament” (“Artistic Integration in Gothic Buildings” 1995) p. 73.

- 17) Sir W. St. J. Hope 1917 および Th. E. Russo “The Romanesque Rood Screen of Durham Cathedral: Context and Form” (“Anglo-Norman Durham 1093—1193” 1994).

なおイリ Ely 大聖堂でも回廊からの入口は当初翼廊西壁にとられ後に身廊東端に移されている。Sir W. St. J. Hope 1917 p. 83. 註2)。

- 18) 聖職者席が使用可能となったあたりで工事をいったん止める、という例は明らかに聖職者席の使用を何よりも急いだということを示している。一例がノリッジ Norwich 大聖堂である。ノリッジでは聖職者席が交差部と身廊東2ベイを占めるが、工期の切れ目が高窓層ではちょうどその第2ベイまでにあたる。第3ベイは障壁 *pulpitum* の場、第4、5ベイは身廊至聖所 *nave sanctuary* にあたるが、アーケード柱のレベルではこの第5ベイまでが第一期にあたる。E. Fernie “An Architectural History of Norwich Cathedral” 1993 p. 44.

- 19) Lehmann-Brockhaus 文献番号1375。

*Quod illo cadente cecidit. Monachi enim omissis officinarum aedificationibus, operi ecclesiae insistunt, quam usque navem Rannulfus iam factam invenit.*

和訳すれば、「彼（ウィルヘルムス）が死去する、ということが起きたために、修道士たちは修道院建築を棄てて教会堂建築に精力を向けた。ランヌルフスは（司教に就任したとき）この教会堂建築が身廊部まで出来上がっているのを見た」。

- 20) J. Bony “La technique normande du mur épais a l’époque romane” (Bulletin Monumental 98 1939).

- 21) ビルソンの論文は、中央ヴォールトが側壁よりもっと後の付加だという同時代の論への反論でもあり、第二期ヴォールトが壁と同時だという主張が中心となっている。したがって、第一期でヴォールト放棄とは明言していない。しかし、p. 143 ではほぼそう示唆している。

- 22) ただしトリビューン開口の内外アーチ・オーダーの円弧の中心がずれている点はこの部分特有である。この形の理由はわからないが、可能性として考えられる唯一の理由は、アーチ頂の位置を翼廊東壁とそろえようとした、つまり外側オーダーの頂をすこしでも下げようとした、ということである。

- 23) J. Bilson 1922 p. 143.

- 24) M. Thurlby “The Romanesque high vaults of Durham Cathedral” p. 56—.

- 25) サールビーによると、単円柱の太さは内陣で6フィート、身廊で7フィートである。またビルソンによると、単円柱の柱礎は内陣・翼廊で径7フィート、身廊で8フィートである。

M. Thurlby “The Romanesque high vaults of Durham Cathedral” p. 55. J. Bilson 1922 p. 112.

26) J. Bilson 1922 p. 119.

27) J. Bilson 1922 p. 123.

28) J. Bilson 1922 p. 123.

29) 内陣では長方形であった側廊ベイを正方形平面に近づけたのも、すでにそうになっている翼廊での経験からかもしれない。交差ヴォールトやリブ・ヴォールトでは正方形平面のほうが各アーチ要素の形がとりやすいからである。

30) J. Bilson 1922 p. 112.

The British Archaeological Association Conference Transaction 1980 綴じ込みの R. W. Billings 1843 の平面図には各ベイ柱間東西長さが内法で記されている。それによると内陣が東から 14.9, 14.1½, 14.2, 11.9½, 身廊が東から 11.6½, 12.10½, 12.10½, 15.8… (単位はフィート)。

31) J. Bilson 1922 p. 149. 註 2。

32) 身廊東端トリビューン層のセットバックしない処理も、東端ベイの壁を増やしてベイ長さを補うという結果になっている。従って、第一期ですでにベイの短さの修正の意図があった可能性もある。

33) 以下翼廊の形の解釈はおもにサールビーによる。M. Thurlby “The Romanesque high vaults of Durham Cathedral” p. 47—。

34) 側廊トリビューン上の 4分の1 円アーチ壁については、近年では中央ヴォールト支持の機能はほとんどないとされているが、ジャレットとメーソンは建築家の意図としては中央ヴォールト支持の配慮の可能性を見ている。トリビューン層の厚い壁を残す処理も同じ意図が背景にあるとも考えうるだろう。

M. G. Jarrett, H. Mason “Greater and More Splendid” Some Aspects of Romanesque Durham Cathedral (Antiquaries Journal 75, 1995).

#### 図版出典

図 1 A. W. Clapham “English Romanesque Architecture after the Conquest” 1934.

図 2 “Anglo-Norman Durham 1093-1193” 1994.

図 3 Gesta 22-2, 1983.

図 4, 6, 7, 8, 9, 13 „Engineering a cathedral” 1993.

図 10, 11 The Archaeological Journal 79, 1922.

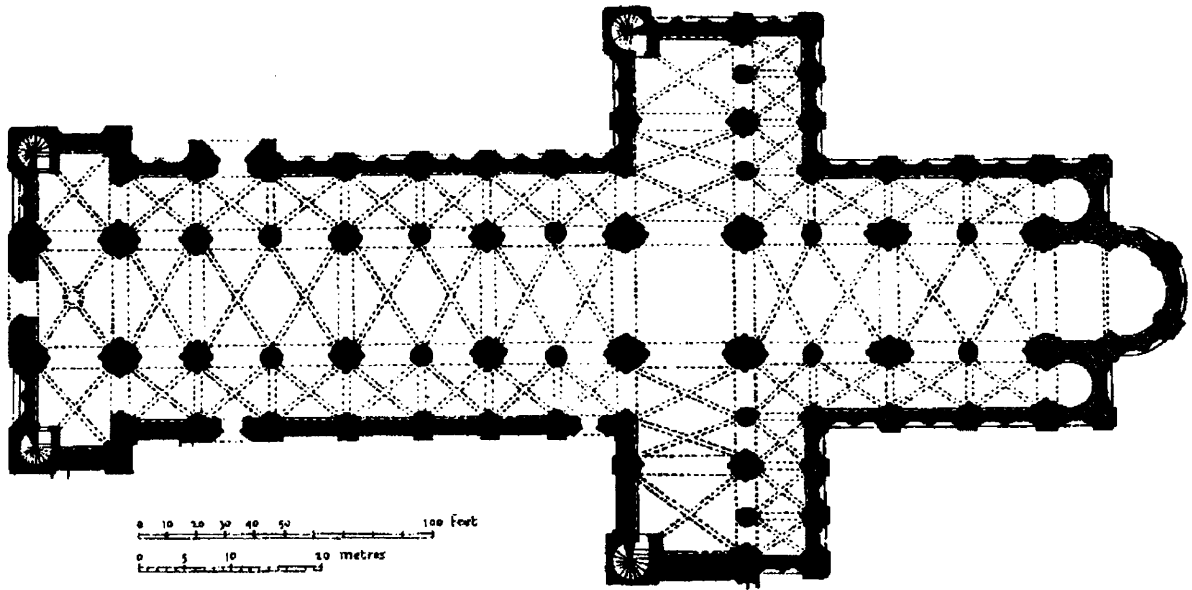


FIG. 6. DURHAM CATHEDRAL.

図1 ダラム大聖堂  
12世紀半ばまでの平面 (J.Bilsonによる)

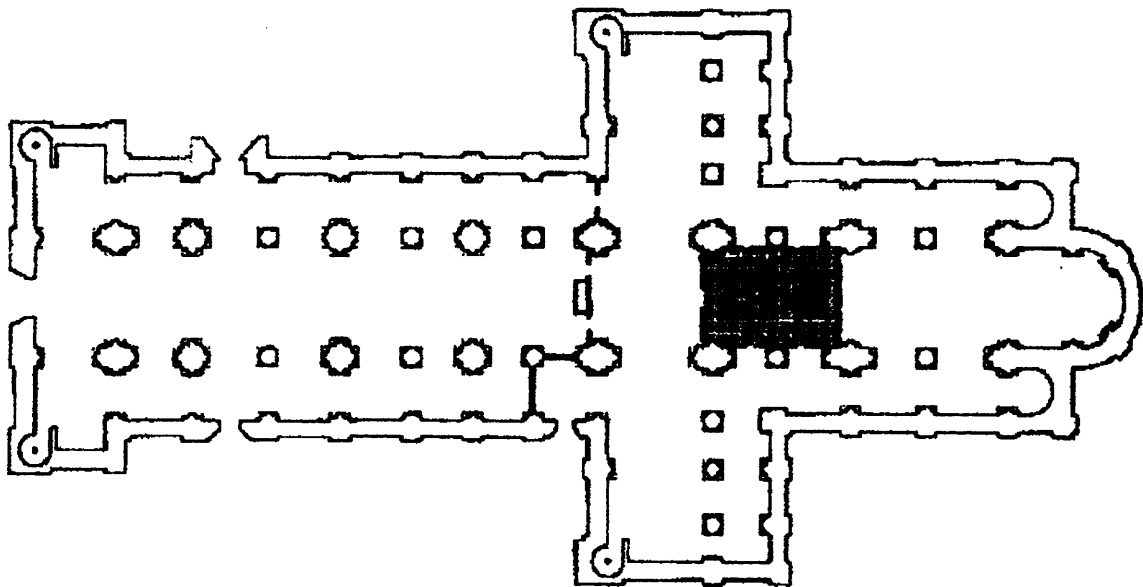


図2 ダラム大聖堂  
聖職者席と障壁の後元 (Th.E.Russoによる)

DURHAM CATHEDRAL,  
ELEVATION OF BAY OF CHOIR, NORTH SIDE

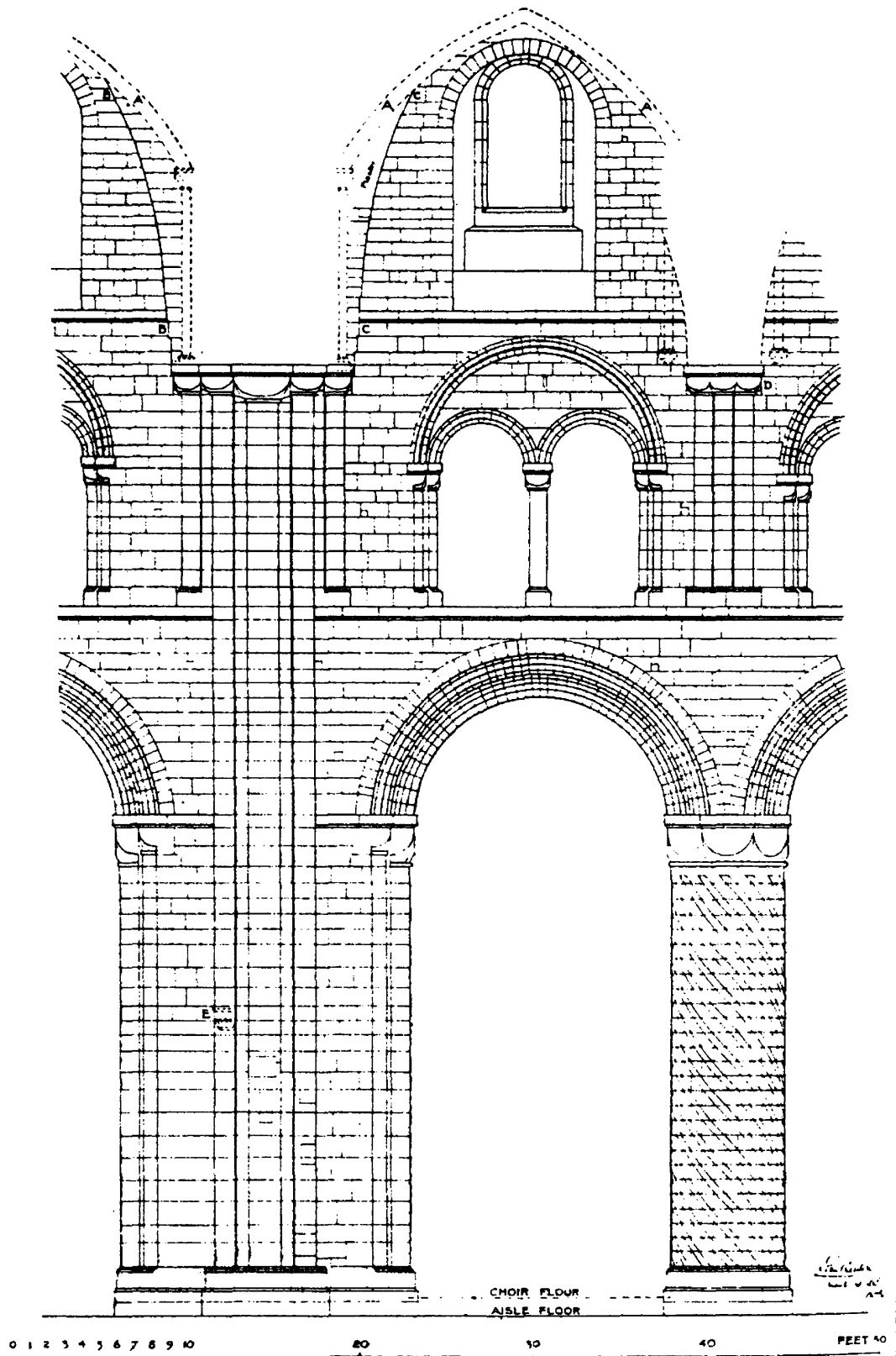


図3 ダラム大聖堂 内陣北壁立面 (J.Bilsonによる)

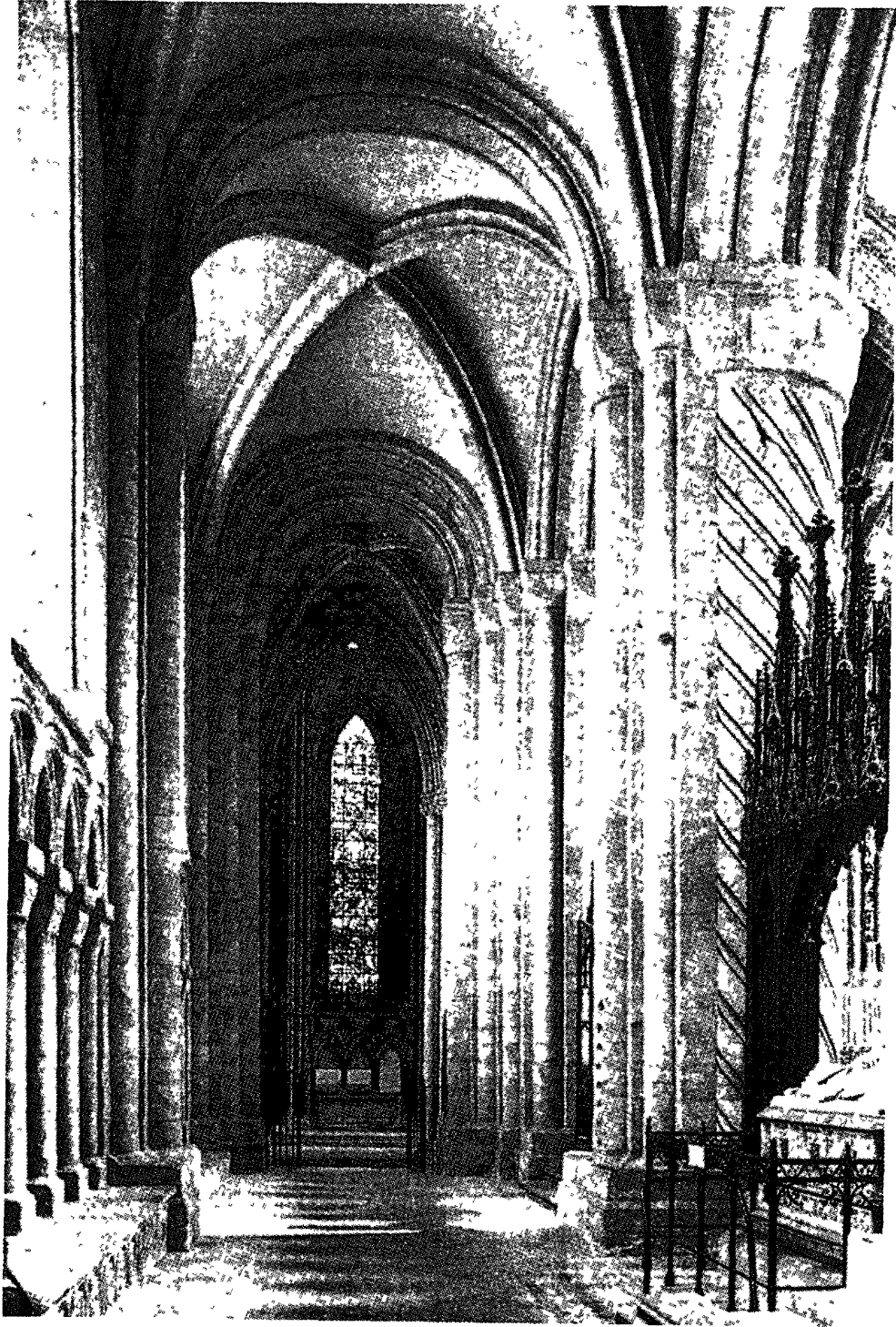


図4 ダラム大聖堂 内陣北側廊（東へ）

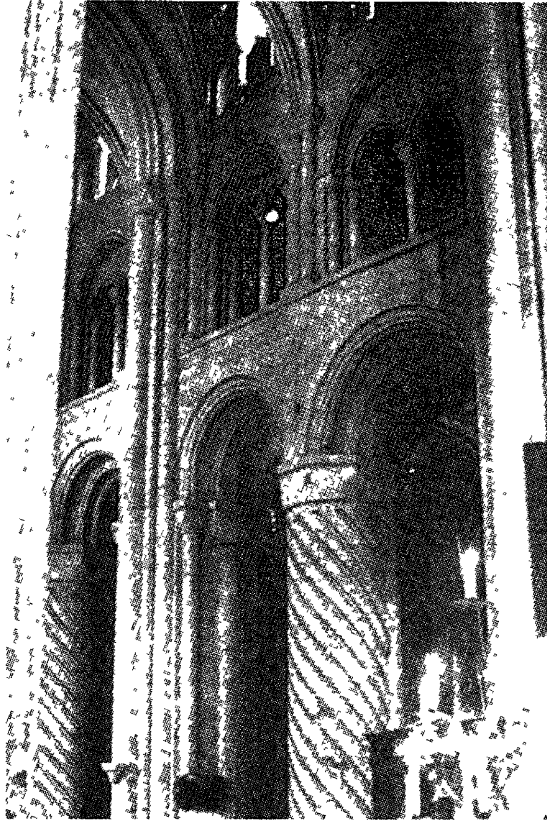


図5 ダラム大聖堂 北翼廊東壁

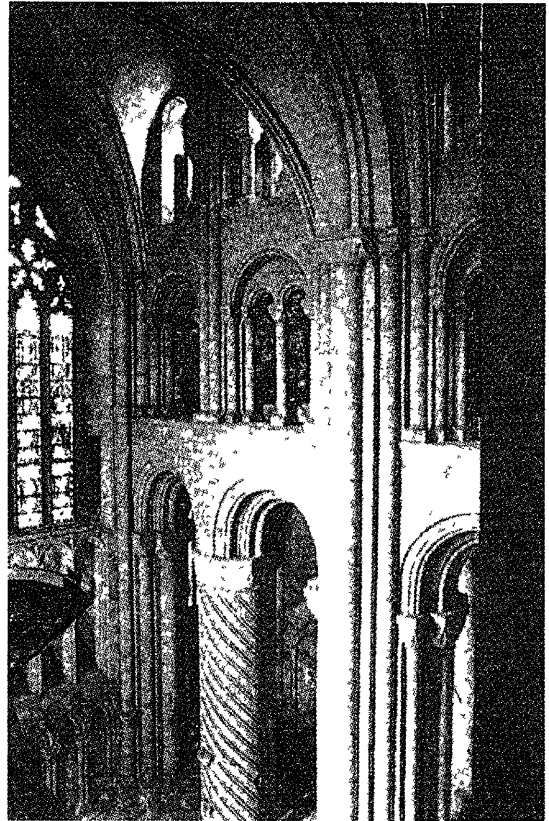


図6 ダラム大聖堂 北翼廊東壁

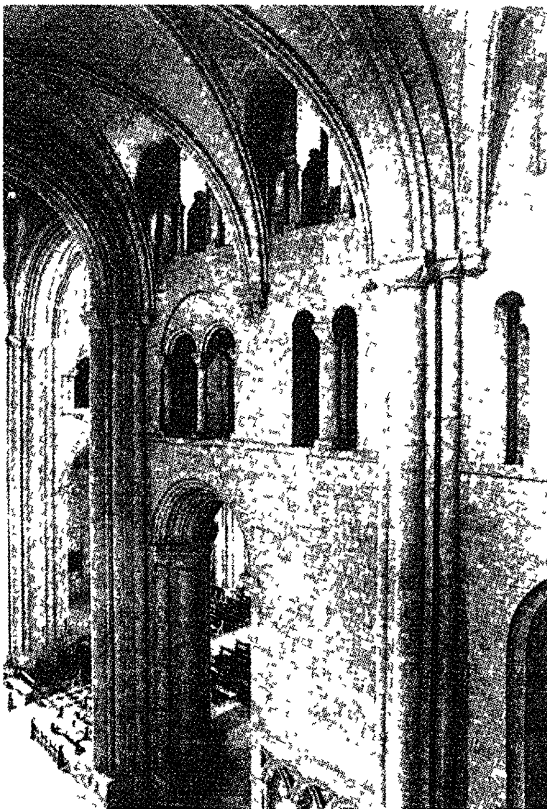


図7 ダラム大聖堂 北翼廊西壁

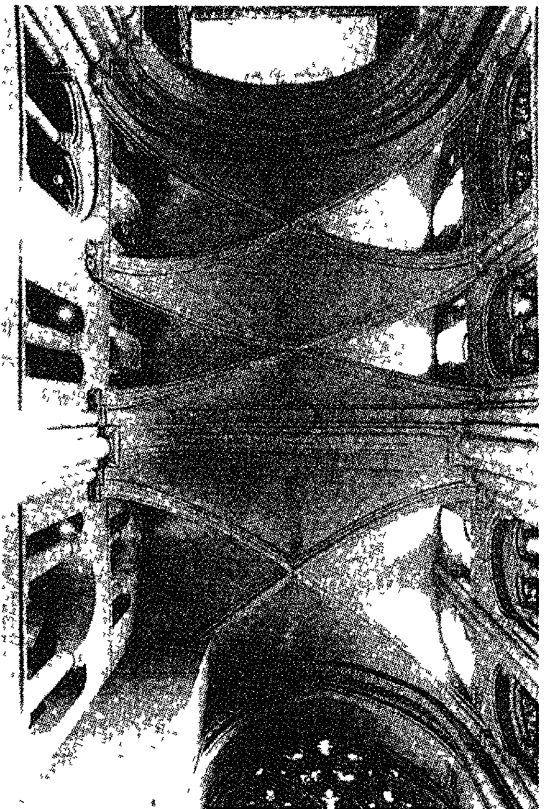


図8 ダラム大聖堂 北翼廊ヴォールト

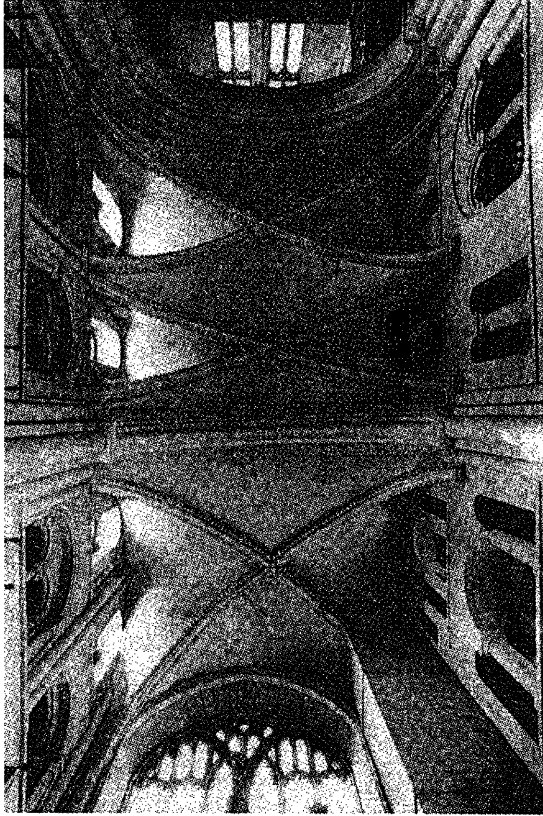


図9 ダラム大聖堂  
南翼廊ヴォールト

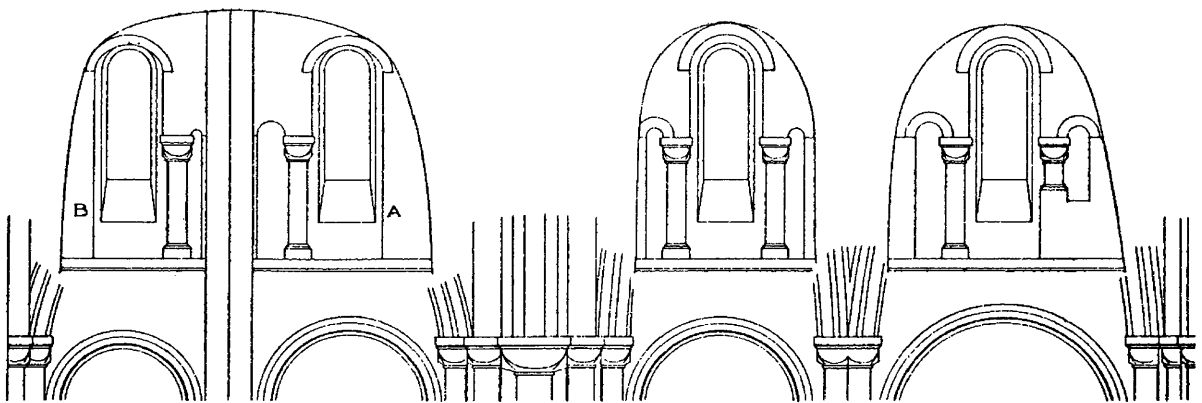


図10 ダラム大聖堂 北翼廊東壁高窓層 (J.Bilsonによる)

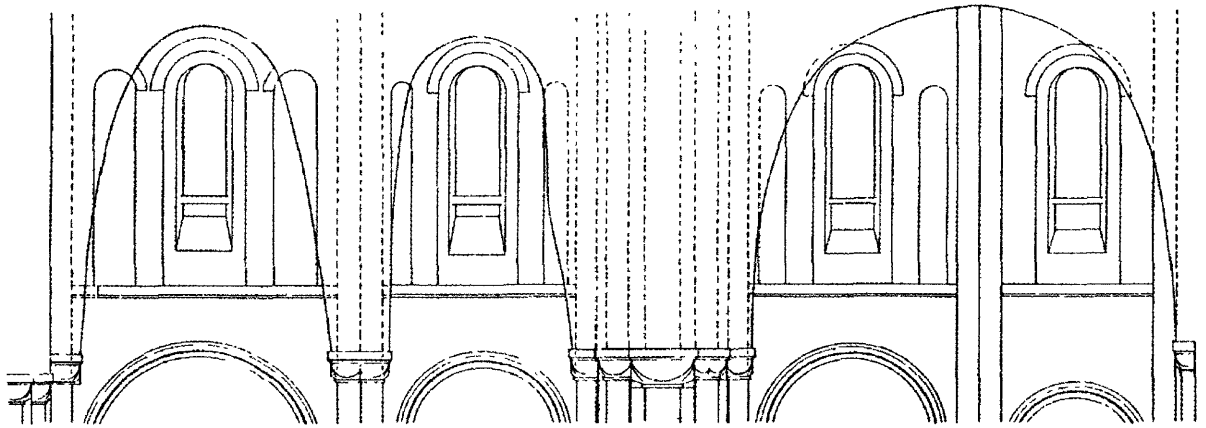


図11 ダラム大聖堂 南翼廊東壁高窓層 (J.Bilsonによる)

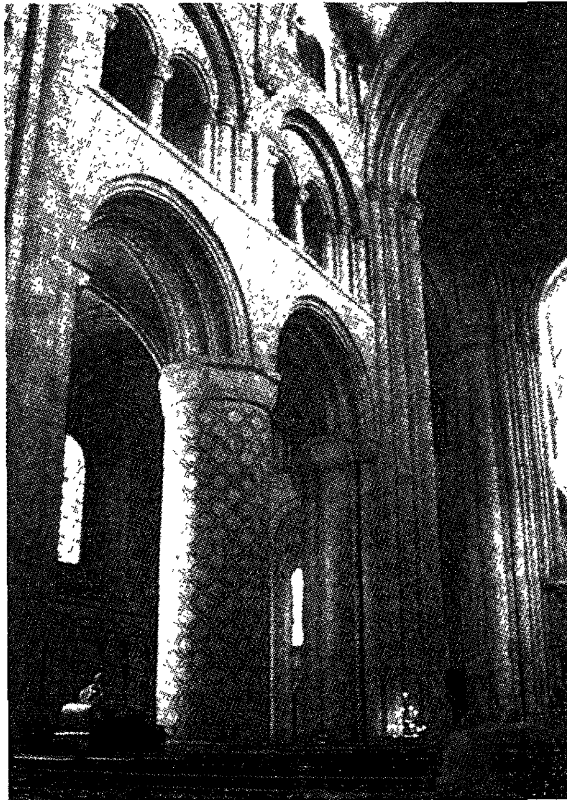


図12 ダラム大聖堂 身廊北壁東端





図13 ダラム大聖堂 身廊北壁東端トリビューン層



図14 ダラム大聖堂 身廊南側廊東第一ベイヴォールト